

頼れる介護施設」「危ない施設」の見分けかた

2回シリーズ【その1】

多くの雑誌やネットの世界では「有料老人ホームの選び方」や、「老人施設のランキング」なるものまで解説してくれる情報があふれています。利用者側にとっての問題は、その中身を見分けるだけの知識と経験があまりにも少ないことです。2回にわたって介護サービスや施設選びのポイントを紹介します。



■ “ケアマネ”さんを味方につけ、しっかり働いてもらう方法

介護を成功させる鍵は、自分の家族のためにしっかりと働いてくれるパートナーを見つけることです。介護の必要が生じたからといって、すぐに介護施設に入所できる可能性は極めて低くなっています。全国各地に5500以上ある特別養護老人ホームは、そのほとんどが満床状態です。申し込みから入所までに2年以上かかることも珍しくありません。

いっぽう、有料老人ホームの入所には十分な調査に時間が必要で、高額な費用を考えれば即断することは困難です。また、介護保険の申請からサービス利用まで、手続きに要する時間は1ヵ月を見なければならぬ実情を考えれば、「在宅介護」の時間を多くの家族が経験することになります。

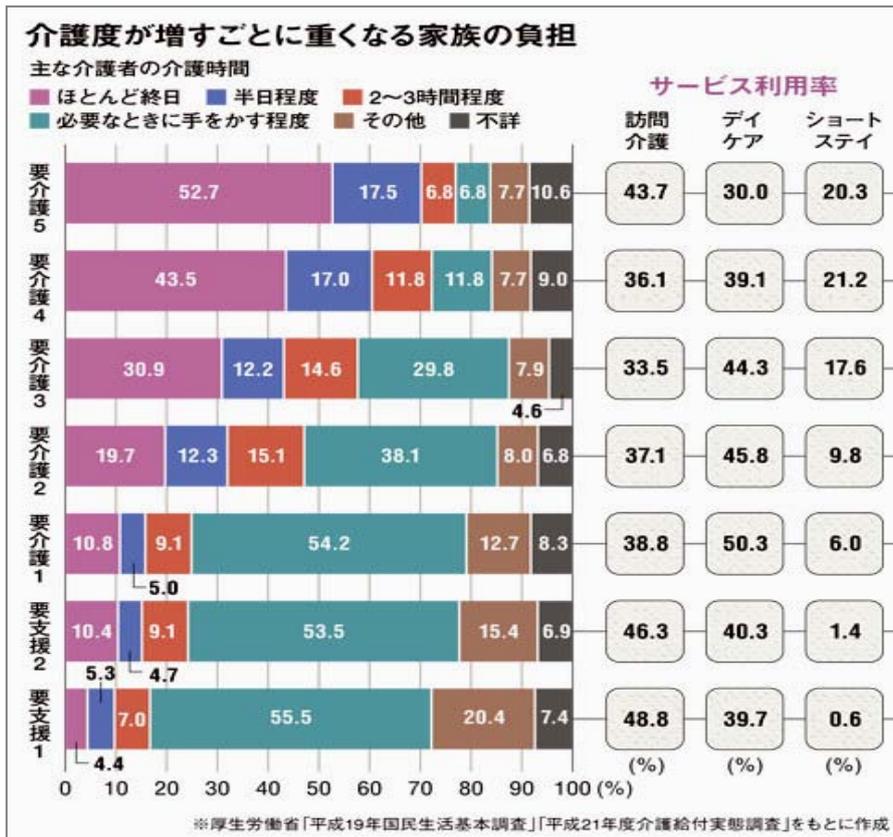
ところが、この在宅介護をやりくりすることが非常に困難です。家族の問題なのだからみんなで協力すればなんとか乗り越えられるはず、と考えたいところですが現実には甘くありません。

年老いた夫が妻を介護することによっておこる老々介護の悲劇が繰り返され、介護の負担によって仕事を辞めなければならない事態に発展するケースも年間14万人に上っているそうです。

さらに、在宅介護のスタート時点でつまずくと、介護施設選びにも悪影響を及ぼします。一刻も早く、介護の現状から逃れたいために、施設選びに失敗してしまうのです。

在宅介護を成功させるためには「家族で抱え込まないこと」とよく言われますが、まさにその通りで、介護にまつわる数多くの問題を解決してくれるキーパーソンとして『ケアマネジャー』の存在があります。介護保険利用の申請を済ませたあと、サービス利用開始のためのケアプランを作成する際に、初めてケアマネジャーとの出会いがあります。





この、信頼できるケアマネジャーとの出会いがその後の介護の善し悪しを決めるといっても過言ではありません。現在、在宅介護をサポートする介護サービスには、ホームヘルパーによる訪問介護、1日のうち数時間、介護施設で預かってくれるデイサービスやデイケアサービス、数日から2週間程度施設に入所できるショートステイなどがあります。さらに、看護師が自宅を訪問し点滴管理などを行ってくれる訪問看護サービス、入浴機器を備えた車が自宅に来てくれる訪問入浴サービスなどもあります。

これらのサービスをどのように組み合わせて利用するかを決めるのがケアプラン作成で、その役割を担っているのがケアマネジャーです。

しかし、ケアマネジャーの質は均一ではなく、その能力には大きな差があるのが実情です。できることなら、能力の高いケアマネジャーとの出会いを期待したいところですが、そうならない場合も覚悟する必要があります。

そこで提案したいのが、いいケアマネジャーを見つけることを考える前に、目の前にいるケアマネジャーを味方につける方法です。

要介護者の健康状態はもちろん、社会的であるかなど性格に関すること、家族の構成からそれぞれの仕事と介護に関わることのできる時間に至るまで細かく伝えます。そのうえで、最良のケアプランを一緒に考える方向に持っていきます。

サービスを利用する側から積極的に働きかけない限り、ケアマネジャーを使いこなすことはできません。介護を成功させる鍵は、自分の家族のためにしっかりと働いてくれるパートナーを見つけることです。



■ホームヘルパーさんとのつきあい方

在宅介護は、その期間の長さに関係なく、おそらく介護をするための基礎体力をつける期間と考えてよいでしょう。だからこそ、手を抜かずに取り組まなければ先の展望が開けないのです。

今後、高齢者を受け入れてくれる施設不足の状況が改善される希望がそれほど持てない中で、在宅介護サービスの賢い利用法はぜひともマスターしておきたいところです。



介護保険制度において訪問介護サービスと呼ばれ、買い物、調理、食事介助、入浴介助、排泄介助などのサービスが提供されます。しかし、電球の交換、犬の散歩、芝刈りなど要介護者に直接関わりのないサービスは禁止されています。オーストラリアなどのホームヘルプサービスでは、こうしたサービスも高齢者の生活を支えるという観点から認められていますが、日本の場合は高齢者の直接的な介助に限定されています。

このサービス内容の解釈がサービス提供者と利用者の間でしばしばトラブルの種になるのですが、「黙って何でもしてくれるホームヘルパーは、親切なようで実のところ考えもの」、と多くの専門家は指摘しています。

「法律で禁じられたサービスはできません」と、きちんと伝えられるヘルパーを選ぶべきです。「融通がきかない」と非難したくなることもあるかと思いますが、サービス選びの原則は、「法律や規則をしっかり理解し、信頼に足るパートナーを得る」ことから始まるのだと認識しておかなければなりません。さらに、サービス利用者側が良い人になっていたのでは、結果的に痛い目に合う可能性のあることを知っておくべきです。

介護サービスの利用は人と人とのやりとりです。どうしても相性が合わないこともあります。その場合は、ヘルパーの変更、利用するサービス事業所の移動を希望することができます。ケアマネジャーに相談して、早めに決断することです。判断が遅れば、それが致命傷になることもあります。



■ショートステイ、デイケアの賢い利用法

次は、介護施設を一時的に利用して在宅介護の負担を軽減するサービスの選び方です。

施設に入所してしまえば、そこが住まいになります。短期間の利用では自宅との行き来が発生します。そこで、日常生活の延長線上で快適に利用できるサービス利用という視点が必要になってきます。利用者に対して均一のサービス提供ではなく、個々人への対応力に優れたサービス事業者を選びたいものです。

そして、サービス事業者に対する具体的な働きかけが必要です。自分の父、母のお世話をゆだねるのですから、これまで親がどんな暮らしをしてきたのかをきちんと伝えることです。生活習慣や好き嫌いを話して、そのサポートのために働いてくれるのか確認するくらい、強く要望を出さないと伝わりません。

個人の尊厳を尊重して、安心、安全のサービス提供を心がけるなどといった理念は、今どき、どの介護事業者も掲げています。少なくともサービス利用者への個別対応の有無を確認するだけでも事業者選びの失敗の確率を低減させることができます。



道具よもやま話 (2)

道具よもやま話

2

親子鍛冶



わが国の大工は、職人氣質（かたぎ）といわれるように、昔から仕事の質に関わる道具と材料については並々ならぬこだわりをもってきました。また道具をつくる側の鍛冶も大工の心意気に応じようと、心根を込めて多くの優れた道具を生み出してきました。ここでは職人のやりとりの中から生まれた様々なエピソードを、紹介します。

兵庫県の本木は、江戸時代からの刃物鍛冶の町である。今日ではその生産が殆ど機械化されている中で、昔ながらの手造りの鋸鍛冶の名工・2代目宮野鉄之助（明治34年生）さんがここにいらっしゃる。日本古来の製法の砂鉄から作られた和鋼で鋸を鍛え上げられる人は、今日ではこの人だけであろうといわれている。宮野さんには3人の息子さんがいらっしゃるが、この3人がそれぞれ独立して、立派に家業をまもっている。全国の道具鍛冶が後継者を失い、電動工具に追われて消えていく中で、心温まるご一家だ。



昭和57年、会津に鉋鍛冶の名工・4代目日下部重道（明治38年生）さんを訪ねたところ、一人息子は別の仕事を選び、身の回りの世話をしてくれていた頼みの息子の嫁にも急逝されて、仕事を続ける気力も絶えて、薄暗い座敷の隅に、空ろな顔でうずくまっておられた。それにつけても、大工道具館の資料映画撮影のために勢揃いした宮野さん親子一家は見事だった。炉脇の横座に構えた父と、それに対する3人の先手の息子たち、揃いの衣装・ぴたりと意気の合った槌音が高らかにリズムを奏でていた。

この読み物は、竹中大工道具館元副館長・嘉来園夫ならびに元館長補佐・西村治一郎の2名が主となり、「道具・よもやま話」と題して竹中工務店社報（1983年発行）に連載したものを、改めてここに転載したものです。20年以上前の記述のため、古くなった内容もございますがご容赦下さい。